

## 講演会 教育とニヒリズム(1)

講演者 センター客員教授（コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ助教授）ルネ・ヴィンセント・アルシラ

1999.6.16

今日の話のテーマは、現在の私の研究の中心で、「ニヒリズムとリベラルアーツの学習の関係について」である。今日の話の筋としては、まず第一に、ニーチェのニヒリズムについての理論の説明をしたい。この理論の解釈を用いて今日の文化の分析を行うと同時に、特にその中でも今日の文化において支配的である娯楽文化の問題点を記述する上で、ニーチェの理論をあてはめて考えていきたい。今日の文化の最大の問題としてニヒリズムの問題があげられると思うが、このニヒリズムの問題点を、特に今日の文化が自己完成を求めるperfectionistのリベラルアーツの学習を支援できない状況にあるという点に絞って話を進めていきたい。この自己完成を求めるリベラルアーツの学習の概念は、ドイツ語でいう「ビルドゥング」という概念に関係したものである。話の結論に行き着く方法としては、リベラルアーツの学習を再活性化する道はないであろうかということを探っていきたい。特に近代芸術(modern art)の反体制文化というものに根付かせることによって再活性化することが可能かどうかということを問い合わせていきたい。ここで留意してもらいたいことが二点あるが、まず第一点は、これから話すことは西洋の文化と教育に関することで日本の状況にあてはまらないかもしれないが、後の質疑応答の場で日本の文化と教育にニヒリズムの問題があてはまるかどうかみなさんと討議できればと思う。第二点は、これから話すことは、私が現在研究中のテーマであるので、まだ試行錯誤の段階にあり、自分にとっての希望や夢のような話でもあり、はっきりしない点もあるかもしれないが、その点についても質疑応答の中でみなさんと議論をかわしはっきりさせていければと思う。

まず、ニヒリズムとは一体何であるかという話から始めたい。これはニーチェに即して話したいが、ニーチェの中心的関心・問いは、一体何がキリスト教世界の幻影・呪縛からの解放を引き起こしているのだろうかということであった。ニーチェは、19世紀の終わりに、ニヒリズムは結局我々の人生において意味をもたらしているものや価値の喪失と定義されているが、一体こうした状況が

なぜ生じてしまったのだろうという問い合わせをした。

ニーチェのニヒリズムに関する主要テーマのポイントは、このキリスト教世界からの幻影・呪縛からの解放が、キリスト教文化の中の最も崇高なる諸価値の矛盾によって引き起こされていると考えていることにある。つまり、キリスト教的価値そのものに内在する矛盾が顕現したものがニヒリズムである、とニーチェは唱えた。ニーチェの言葉を引用すると、「なぜ、ニヒリズムの到来は必然的なものとなったのだろうか？それは我々がこれまで抱いてきた諸価値がそのように最終的な結論を導き出したからである。ニヒリズムは、我々の偉大なる諸価値と理想的な究極的な論理的結論を象徴するものだからである。つまり、ニヒリズムとは、これらの諸価値が実際に処理をしていたものを見出す前に我々が経験しなければならないものなのである。我々は時に新しい諸価値を必要とする。」ということになる。

キリスト教的世界の価値観に内在する矛盾についてもう少し説明したい。まず、この矛盾がいかにして発生してくるかということであるが、人生の中における悪に対処するために、キリスト教徒たちは悪が単なる現象の領域に属するという思想を抱き、これに対して真に存在するものが善の世界であると考えた。この真実性(truthfulness)というものがキリスト教徒にとって善の感覚に結びつく中心的な徳となったわけである。しかしながら、この真実性は、その帰結として、より良き世界が存在するという思想の誤謬性をも究極的に暴き出すことになってしまった。ここでニーチェはダーウィニズム(ダーウィンの進化論)に対して異議を唱えたのであるが、ダーウィンの進化論は、より良き世界が存在するなどということはありえなくて、物質界に存在するものはこれまで捉えていたより良き世界ではなくて悪に満ちた世界であるという考え方をもたらすことになってしまった。キリスト教徒たちを善に結び付けていた中心的な徳、真実性がこうしたプロセスを経てキリスト教徒たちを善から切り離すことになってしまった。

こうしたニヒリズムの現実に直面してニーチェが希望として抱いた方向は、ヨーロッパ人たちにこの矛盾を犯

してきたキリスト教文化の根元的な批評と再評価によってこの矛盾から解き放たれた新しい諸価値への道が開かれるかもしれないというものであった。この文化全体について何が悪であるかを理解することによって、反体制文化の基礎となりうる他の諸原理を発見する手がかりが得られることになるかもしれない」とニーチェは考えた。

最後にこのニーチェの理論について一点話しておきたいこととして、これは私の研究とも重なっている点であるが、ニーチェはキリスト教文化の問題を文化外の要因 (non-cultural factors) の効果に還元することによって解決しようとはしていない。文化外の要因とは、例えばマルクス主義的な考え方によると、社会の中の下部構造に矛盾の原因を求めるようとする、社会的、経済的因素にこうした矛盾の原因を求めるようとするわけであるが、ニーチェのアプローチは、もっと文化に内在する諸価値の中の矛盾それ自体として問いかけようとするもので、私自身の文化批評もこうした手法に従ったものである。つまり、今日の文化というものを文化に内在する矛盾そのものとして解き明かしていこうというのが私のプロジェクトである。

話をより今日の状況に移して話していきたい。私がまず問いかけたい問題は、ニーチェが投げかけたニヒリズムの問題は、一体今日の状況にあてはまるものなのだろうかというものである。つまり、ニーチェが問いかけたニヒリズムの問題は、今日のより宗教的なものではなくもっと世俗的な文化が支配的な今日の状況において、ニヒリズムがどのように顕現するのであろうか、キリスト教的あるいは宗教的な問題とは切り離された今日の世俗的な文化の状況の中でもあてはまるものなのだろうかということを問いかけたい。

私の中心的な主張であるが、この問いかけに対する私の答えはYesであり、ニヒリズムは今日の文化の中にも存在しているというのが私の見解である。ただし、我々の今日の文化における表われ方は、娯楽の重視という形で生じていると思われる。今日の文化は、主として娯楽という中心的価値のもとに構成されているというのが私の見解である。

まず文化というあいまいな概念を定義したい。私の捉え方では、文化は、個人と同じく共同体の中枢神経系であるということになる。まず第一に、文化によって我々の認識が可能になり、それから世界の経験が可能になり、文化は我々の経験を記録する役割を果たす。第二に、文化はこうした記録の中から我々がいかに生きるべきかという問題について総括的な判断を導き出すシステムである。つまり、文化は共同体の認識と知性を支援し、同

時に責任感を伴った共同体のアイデンティティ形成を可能にしていく。

次に娯楽作品、娯楽文化というものの定義を考えてみたい。娯楽文化の主要な目的は、ある一定期間にわたって我々の関心を強く惹きつけることである。これがなんらの責任感を呼び起こすことなく行われるという特徴がある。ここで思い起こすことは、バフチンの芸術と応答性 (art and answerability) である。芸術の役割は我々がさまざまな経験をする中から我々自身が応答していくものを引き出すような役割といえよう。例えば、芸術に触ることによって、いかに生きるべきかというような問題を我々自身が問いかける、そうした応答性を導き出すものが芸術である。ところが、これに対して、娯楽文化は、もう一人の批評家であるギダヴォーアが『観客社会 (Society of the Spectator)』という著作の中で述べたもので、つまり我々自身が積極的に芸術にかかわるということではなくて、社会をあたかも遠方から観客のように見ている状況で、例えばテレビをただ受身的に見ている状況のように、我々自身が非常に受身的な状況になっているということである。

次に、娯楽文化の作品はいかにして我々の認識を支援することができるのだろうかということを考えてみたい。娯楽文化の作品は、往々にして日常性から乖離し、断片的で一過性の感情である経験を表現することが多い。逆にこうした作品はより静かで複雑であいまいでかつ持続的な性質を持った日常経験を疎かにする傾向をもつ。このように娯楽文化の中で記録される経験は我々の実際の生活に応答しないように思われる。

次に、先程述べた中枢神経的役割を果たすものとしての文化である娯楽文化は、我々の知性にいかにかかわるか、それをいかに支援できるかということを考えてみたい。娯楽文化の作品は概して次から次へと矢継ぎ早に生まれ出される出来事によって我々の精神を幻想し、気晴らしを与えていたりすることによって、熟慮された判断やその判断に基づく果敢な行為の余地をほとんどなくすことがある。同時に娯楽文化の中の作品は、消費者理解にへつらい追随することによって非常に先が見えた決まり文句であるとか、決まりきった世界観に追従しがちな方向をもつ。このようなやり方によって娯楽文化の中の作品は、我々参加者自身が実践的理性を行使し、育てるように挑むこともなく、またその世界の中の倫理的・政治的な挑戦をとることもない。

以上をまとめると、結局娯楽文化の中の自己内矛盾がどういうふうにして生じるかということであるが、我々の文化が娯楽文化の中心的価値を信仰する状況の中で文

化に文化としての定義を与えるはずの応答性と責任から我々自身の文化が乖離してしまうことになる。こうした中で、娯楽文化は、自己内矛盾をかかえ、反文化的な要素をもつことになり、娯楽文化はニヒリスティックなものとなっていく。

次に、なぜ文化の中の自己矛盾がどのように生じるかということをさらに深めていきたい。私の見解では、娯楽文化から欠落しているものは、先程冒頭に述べた自己完成を目指すperfectionistのリベラルアーツの学習というものということになる。

次に、リベラルアーツの学習の特質を述べたい。有名なマシュー・アーノルドの『文化と無秩序』という著作の中から引用したいと思う。アーノルドは、下記のように述べた。「文化とは、我々にとって最も重要な事柄について世の中でこれまで考えられ、語られてきた最高のものを知ることを通じて、我々自身の全体的な完成を追及することである。我々は既存の概念と習性に着実に従うことには、機械的に追従することの悪を埋め合わせるところがあるというむなしい幻想を抱きながら、着実ながらも機械的に既存の概念と習性の蓄積に従って生きている。しかし、自己完成に通ずる最高の知識の取得を通じて、こうした既存の概念と習性に新鮮で自由な思考の流れが注ぎ込まれることになる。」

ここでアーノルドが述べた学びの概念をさらに深めて考えてみたい。この中で私が着目したいのはアーノルドが述べているpursuit of perfection、すなわち「完成の追求」という概念である。これは一体どういうことを意味しているかというと、その目的が単に学び手である生徒の中に情報を再生産させて模倣のプロセスとしての学びではなく、生徒自身の自らの自己発達・成長を奨励してその責任を受けさせるような学びの形である。これは例えば、私のシカゴ大学での指導教官であったフィリップ・ジャクソンが述べているところの「自己変容的な学習」という概念であるとか、ハーバード大学の哲学者であるカベルが述べている「道徳的完成主義」という概念に通ずる学びの概念である。

このアーノルドが述べる学びの概念をさらに細かく見てみると、三つの特質が挙げられる。アーノルドの学びの概念は、まず基本的には自由の概念に基づいているゆえに、非常に伝統的な意味でのリベラルな学習の概念であるといえる。三つの特質がいかにしてリベラルな学習であるといえるかというと、まず第一に、それは対等な関係における対話に根差した学びであるということであり、これは固定的な階層関係に縛られないことがない。例えば、階層的に上位のものがいて、その下に学び手がい

て、その下層にある者がある者に追従することによって学ぶということではない、そうした学びの形態である。もしこういう階層関係の中に縛られると、学び手自身が自己責任をとれないことになってしまう。それから第二に、これは非常に、実験的な(experimental)な特性をもつものであって、固定的な目的に縛られないという特性を持っている。これは例えば、オークショットという思想家が述べる比喩的な概念で、冒險としての学びというものに該当するものになる。これは学びの過程というものが、発展していく、あらかじめ固定するものではなくて、その中で模索していく冒險の概念である。これは決まりきった道をたどることによって学び手が冒險の自己責任をとることがなくなってしまうという概念とは対照的なものになる。それから第三の特性として、真正性(authenticity)があげられる。これは学び手自身が学ぼうという合意を表現するような形の学習形態である。その対抗概念としては、学びが義務として強制されるというものがあげられるだろう。こういった強制的・義務的な学びとは対照的な、学びの新鮮性を持つ学びといえる。この中で、学び手は学びに対する積極的な役割を請け負うことになる。

アーノルドが述べたリベラルアーツの学習が成立するためには、ある特定の形の文化の支援が必要になってくる。つまり、アーノルドが述べたところの世の中でこれまで考えられ語られてきた最高のものというものの支援が必要になる。この高尚な文化(high culture)は通常次のような三つの特徴をもっている。第一に、それはコスマポリタン的なものである。つまり、それは人間を人間たらしめている人間の条件を考慮するものであって、例えばゲーテが述べた「人間的なもので私にとって無関係なものは何もない」というようなコスマポリタン的な精神というものである。第二に、洗練(refinement)という価値を重んずるということである。これは中枢神経系の役割を果たす文化ができる限り広範で詳細な経験の領域を我々自身の経験の中の高まりから絶望にいたるまで正確かつ正直に記録することに価値を置くことである。それから第三の特徴としては、合理性を重んじることがある。すなわち、形誼的ではあるけれども議論による検証をも喜んで引き受けるような実践的な判断を重んじるといふことがあげられる。

私は、高尚な文化とリベラルアーツの学習を再活性化させていく立場をとっているが、それを進めるにおいてその問題点も考えてみなければならない。高尚な文化とリベラルアーツの学習の一番の問題点は、これがアリストクラシー、つまり特権階級的性質をそもそも

孕んでいること、そして、反民主主義的な起源をもつものであるということである。例えばニューマンが述べたリベラルアーツの教育の定義にもあらわれているが、リベラルアーツの教育は結局有閑階級、すなわち労働から解放された特権階級の人間の教育であるということになる。それから、アーノルドが述べた高尚な文化の概念に対して近年向けられている批判があるが、それはアーノルドの主張は非常に帝国主義的で反民主主義的な政治権力の攻守を正当化させるものであるというものである。つまり、先程述べた高尚な文化の三つの特徴の一つに、洗練という価値があげられたが、その洗練していくという過程において、そうした中枢に属さない他の人々の声が排斥されていき、排斥された人々は非常に劣った存在であると思われるていくという過程にもなりえる、こうした差別的な過程にもなっていくという性質をもっているという批判がアーノルドに向けられている。こうした考察からは、リベラルアーツの学習と高尚な文化は議論の余地があるものであることがわかる。

このように見ていくと、娯楽文化は現代社会においていわゆる大衆文化 (popular culture) と同一視することができて、これがこの現代において非常に支配的な文化的形態になっているということは否定できないわけである。これを民主主義を代表するものであるという立場をもって状況にのぞむこともできるわけだが、私自身としてはそういう捉え方に異議を唱えたい。私の立場を明らかにするために、少し長いけれどもクラークの『クレメント・グリーンバーグの芸術理論』という著作の中から引用してみたい。この引用が、私の立場がどのようなものであるかにかかわってくるだろう。

「19世紀後半から、顕著で一貫性をもったブルジョアのアイデンティティは衰退し始めた。衰退という言葉は弱すぎ受動的すぎるように思われる。むしろ、ブルジョアは社会制御 (social control) を維持するための代価としてその中心的なアイデンティティを分解することを余儀なくされたというべきだろう。社会秩序において隸属的で発言権を持たない、しかし晦渋されることのない他の階級に対する権力抗争の一部として、ブルジョアはその文化への要求を捨て去ることを余儀なくされた。そしてとりわけ特権貴族の絶対性、すなわち、ブルジョアが追放した階級の諸価値を引き受け、支配し、維持するという要求を破棄することを余儀なくされた。グリーンバーグはかつて、脚注において、次のように口走ったことがある。我々の欲するものは、アテナ、すなわち無限の諸相、豊穣さ、すなわち壮大な知識を備えた正式な文化である。こうした特性に加え、非妥協性、情動的な生活に

おける郷土と危険、名声に対するすさまじいまでの敬意、正確な自意識への欲求、ありきたりの日常生活などがある。しかし、そうした特性はとりわけ封建的な支配階級の贅沢である。それらはブルジョアが遺産として引き継いだと信じたところの特性であり、同時に1870年以降の階級闘争において文化的な障害になったゆえにブルジョアが捨て去ることを決意した特性でもある。かくして、こうしたブルジョア文化を、グリーンバーグは、キッチエ（俗悪な芸術）、すなわち、アイデンティティの喪失をもくろむブルジョアの象徴とした。それは即席に消化されるもの、日常性への退廃的な妥協、困難さの回避、無関心の装い、既存のイメージの前における平等などから成り立つ芸術と文化である。」

今のクラークのグリーンバーグ批評に結びつけて、ブルジョア文化についての私の見解をまとめてみたい。19世紀後半に、ブルジョア文化が社会のリーダーシップをとる形で形成された。先程述べたように、高尚な文化は特権貴族的な特徴をもつ、例えば洗練という価値や構造を背負ったものであった。しかし、ブルジョアはそうした特権的な階級をもった高尚な文化をもつた民主主義的な方向にもっていこうとする努力をした。それはより多くの大衆にこうした文化が行き渡るように、そしてより多くの人々により高尚な生活が可能になるように仕向けようとした。このようなブルジョアがとった方向は、ある問題を孕むプロセスであったというのが私の見解であり、クラークとグリーンバーグが述べていることである。グリーンバーグが述べた「キッチエ（俗悪な文化）」はある誤った大衆文化の形態をとることになってしまったということである。どういう形で偽りの大衆化を促進してしまったかというと、結局お金さえあれば保証された充足が得られるという安易な文化の形態を生み出してしまった。こうした大衆文化の停滞の中で、結局資本と労働の基本的な構造はなんら変わることなく覆い隠されたまま、安易な大衆文化の停滞が流布することになってしまった。こうした意味で、高尚な文化は、リベラルアーツの学習とエリート主義に対する明確な異議申し立てとして発展した大衆文化であったわけだが、私の見解では、真の意味での民主主義的なものではなく、非常に反民主主義的な傾向性を孕んだ、労働階級の搾取の構造を覆い隠したものであったと捉えられる。

すなわち、リベラルアーツの教育と高尚な文化は、これまで述べてきたように、ある特権階級的な構造をもつものであって、こうした意味では問題性を孕み、反民主主義的な傾向を孕むものであったわけである。その一方で、ブルジョアカルチャーである娯楽文化の形成にも破

綻したわけで、それは大衆文化を促進させ、表面上は反エリート的な方向をとることになったわけであるが、実は階級構造を残した反民主主義的な構造を残したものであつたというのが私の分析である。こうした分析に基づいて、私は問い合わせを投げかけたい。伝統的なhigh culture(高尚な文化)とリベラルアーツの学習とを特権階級的な方向をとらずにより民主主義的な方向へと発展させる道はないであろうかというのが私が投げかけたい問題である。つまり、娯楽文化的な方向をとることなく、高尚な文化とリベラルアーツの学習の方向を発展させることはできないであろうかという問題提起をしたい。

次に、私自身、近代芸術と文学にこうした問いかけへの答えを見出したいと思う。近代芸術と文学は、私の見解によると、反体制的なブルジョア文化を代表するものである。この文化は、商業主義的な娯楽の退行に反対し、それが倫理的・美的な意味での退廃をもたらすと考える。その代わりに、伝統的な高尚文化の目標と規範に修正をもたらす。近代芸術と文化は商業主義的な側面に対して批判を向けながら、同時に伝統的な高尚文化のもつ目標や規範を引き継ぐということを行っている。その反体制的な文化は、高尚な文化を単に保存することではなくて、ある種反動的な方法で高尚な文化が今日の民主主義社会の形態を新しい進歩的な方法によって発展させることによってこの民主主義社会を活性化することができるということを示そうとする。それが私の捉えるところの近代芸術と文学の役割である。つまり、伝統を引き継ぎつつ、それを新しい仕方で活性化させていく役割を果たすのが近代芸術と文学であるということだ。

近代芸術と文学という特性を述べてみたい。それはまず階層の区分、あるいは、自己と他者の区分を強調するのではなく、自己疎外の経験を強調する。つまり、自分が他者から疎外されて、孤立した感覚を引き受けている

といった経験を小説や芸術はあらわそうとする。そうした疎外の経験において、コミュニケーションや共同体はもはやあたりまえのものとしては捉えられなくなり、むしろこれに疑問を投げかけるような形がとられることがある。例えば、何か慣れ親しんだ絵画や芸術というもののしきたりを前にしてそれをあたりまえのものとして引き受けずにこれに疑問を投げかけるような世界へのかかわり方というものをすることになる。例えば、ある芸術家というものが既存の共同体に属しているんだということをもはやあたりまえのものとして捉えないような、そうした世界のかかわりかたをするものが近代芸術と文学の一つの特性である。

私の結論としては、二つの問い合わせを投げかけたい。まず第一の問い合わせは、こうした近代文化が支援する学習形態を詳細に描き出すことによって、近代文化の希望を再活性化することはいかにして可能になるのであろうか。それは、近代ということの価値を、近代的であるということに求めるのではなくして、先程述べたような例えば疎外という特質をもったものとして捉えることによって、そうした疎外構造をもった文化が学習をいかに支援していくのだろうかというように問い合わせていく方法である。第二の問い合わせは、こうした新しい学習の形態が従来のリベラルアーツの教育の目標と過程を修正する方法を一体示唆しうるのであろうかということである。つまり、リベラルアーツの教育が特権貴族的な装いから脱皮してより直接的に娯楽文化のニヒリズムの問題に取り組めるようになることはいかにすれば可能になるのだろうか。これが私の現在の研究における中心的な問い合わせである。この二つの問い合わせに取り組むために、私は近代主義文化におけるリベラルアーツの新しい学習理論、すなわち実存的な学び(existential learning)と私が呼ぶところの理論を目指構築しようとしている。